

## 経営工学実用辞典

日本能率協会編・発行 一栗信雄・島田照代・野村弘光執筆 323頁

OR, IE, システム工学の定義, 解釈については, いろいろの人が, さまざまな立場から行なっているが, 工場における“人, 資材, 設備の総合的なシステムの設計, 改善, 実施に関する問題”(アメリカIE協会によるIEの定義——本書より引用)は, OR固有の場でもある。また, 近時, これらの分野は, コンピュータと切り離しては考えられなくなっており, コンピュータを前提とした手法が増加しつつある。

こうした環境のもとで, 経営工学の諸手法の理解, 習得に必要な専門用語を収録した本書は, IE固有の分野に原点をおきつつ, ここから派生する形で, 関連分野を幅広く対象にしている点を第1の特徴とする。約850の見出し語の構成比率をみると, これが理解されよう。

IE 約35%

コンピュータ・システム, プログラム 約15%

QC(品質管理) 約7%

統計, 確率理論 約8%

数理計画, ゲーム理論, グラフ理論 約7%

原価管理, 財務 約7%

人事, 労務, 人間関係論 約8%

経営管理一般 約13%

なお, この分類は, 評者によるもので, コンピュータを用いた生産管理手法など複数分野にわたるものは, 記述内容によって, いずれかに割りきって分類してあり, 大体の目安を示すものである。

第2の特徴は, 学術的観点よりも, 企業, 生産部門など実際の場で頻繁に用いられる専門的かつ実用的な用語に重点をおいていることである。また, 専門家間では一般的でも, 初心者にはわかりにくい略語, たとえばMM(マテリアル・マネジメント), DM(デンマル・ミニット), OLRTシステム(オンライン・リアルタイム・システム)などを多数採択し, 解説を加えた約850の見出し語に加えて, 約140語を同意語としてとりあげ, 参照できるように配慮してある点, 略語が多用される昨今, 特に重宝である。また, 解説にあたっては, 固有の学問領域を越えて, 日常業務における応用面をふまえつつ,

平易な解説を試みている。ややもすると, 学問的な専門性を重視しがちなこの種の辞典の中にあつて, “実用辞典”と銘うった狙いが具現化されている。

第3の特徴は, 最近, 生成された用語, 新しい手法, 一般化されたものについては, コンピュータ・プログラム, 特定企業で開発された手法の採録に努力が払われていることである。進展の早い分野であり, たぶん, 編集作業の間に生成したであろう新しい用語については, 今後の追加を望みたい。たとえば, ワークステーションの解説に, コンピュータ端末によるワークステーションの概念の追加, 分散処理システム, ローカル・ネットワークなど工場内の情報処理に関する項目の採択である。

第2の特徴とも関連するが, 表, グラフ, 図をふんだんにとり入れた点も, 類書にあまり例をみない特色である。運搬工程分析, サブリックなどの諸記号, ポアソン分布グラフ, SLP(システマティック・レイアウト・プランニング)など諸手法の手順をはじめ, 約55を数える。

巻末には, 欧米索引に加えて, 付録として, (1) 経営・管理工学一般, IE各分野, 品質管理, 人事・労務, 原価・会計, OR, 情報・コンピュータについて, 現在刊行中の邦書約80種類の参考文献, (2) 統計処理用各種数表, (3) 関連JIS規格, (4) 工程図記号, 情報処理用流れ図記号のJISに準拠した説明と具体的な使用例, 応用例, (5) 事務工程分析記号を収録してある。日常業務において, 必要に応じて参照するのにきわめて便利である。

最後に, 用語について, あえて希望をのべさせてもらおうと, コンピュータ関連用語については, JISあるいは情報処理学会規格委員会に準拠していただくと, 利用者にとって, 論文作成の際など, さらに有用であろう。実時間処理システム, コンパイラに代えるに, 実時間システム, コンパイラなどその例である。

ともあれ, IEエンジニアをはじめとする企業内実務家, 経営コンサルタント, 経営工学専攻学生にとって, 日常業務または学習用として, 常時, 手許に備えておくべきものであろう。(山下達哉 日本アイ・ピー・エム)